

サッカーサークルにおけるチームワーク促進要因とは？ －集団凝集性とスポーツ動機付けの関連に着目して－

情報科学ゼミナール 1315067 米山尚希

1. 研究動機・研究目的

電通報(CAMPUS LIFE DATA 2014)によると2014年次の大学サークル加入率の調査では、大学生全体でのサークル加入率は70.5%で大学1年生だけに絞ると82.8%であることが調査によって判明しており、実に日本の19~23歳の3人に1人は何らかの大学サークルに所属しているという計算になると報告している。また、上記の同調査の2002年から2014年までの調査では2002年次の加入率56.2%から2014年次の70.5%まで12年間右肩上がりに大学サークルへの加入率が増加傾向にあることが報告され、大学生サークルの加入率は年々増加傾向にあり、今の大学生にとって大学サークルへの参加、加入は当たり前となってきている。新井、松井(2003)は、大学サークルの多くは、原則として学生の自主的な意思に基づいて結成され、構成員は学生であり、加入も運営も学生の自発的意思決定に基づいている特徴を持つと述べ、大学生の居場所となる身近な集団の1つであると述べている。

サークル集団はインフォーマル集団とフォーマル集団の性質を併せ持つと指摘され大学サークルには2つの側面が存在している状況であり、それと同時に様々な問題点を抱えていることを明らかにした。

本研究では大学サッカーサークルに所属をする学生を対象とし、大学サッカーサークルにおける集団凝集性を向上させる要因、低下させる要因としてどのような要因が存在するのかをスポーツ動機付けの側面からの関連に着目し要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究は、千葉県内の社会人リーグで活動を行っているサッカーサークルを対象とし、対象のチーム数は2チームである。サークル活動を行っている2つのチームに所属するメンバー、所属経験のあるOB計90名を対象に調査を行った。調査の方法は質問紙によるもので、調査を行う際には、各チームの代表者、チームのメンバー、OBそれぞれに事前にアンケート調査に関する連絡を取り、同意を得たうえでアンケート調査を行った。本研究では、集団凝集性を測る尺度、スポーツ動機付け尺度の2つの尺度を使用し、質問調査を行い、調査対象者は質問内容に対して、「1. まったくそう思わない」、「2. あまりそう思わない」、「3. どちらでもない」、「4. ややそう思う」、「5. とてもそう思う」の5つの選択肢から1つを選び、回答を行った。アンケート集計後の分析方法の際にEZRを使用し、集団凝集性尺

度、スポーツ動機付け尺度の双方の因子分析を行い因子の名称を再設定した。その後、因子ごとに相関係数の検定(Pearsonの積率相関係数)を行い、因子ごとに相関があるのかを調査した。

3. 主な結果と考察

集団凝集性尺度の因子分析を行った結果、質問項目全18項目を4つの因子構造に分類することが出来た。質問項目の信頼性を意味する α 係数においても第I因子 $\alpha=.82$ 、第II因子 $\alpha=.85$ 、第III因子 $\alpha=.78$ 、第IV因子 $\alpha=.78$ という値が確認され、質問項目の信頼性が確認された。4つの因子構造に分類できたということと各因子の名称設定の妥当性においては、先行研究通りの結果が出たことが認められた。しかし、因子ごとの質問項目の並びにおいては、本研究で抽出された結果と先行研究で抽出された結果とでは若干の違いを確認した。スポーツ動機付け尺度の因子分析を行った結果、全41項目の質問項目を9つの因子構造に分類することが出来た。本研究を行うにあたって参考にした先行研究のスポーツ動機付け尺度は、もともと質問項目が25項目であり本研究では先行研究の25項目に16項目の質問項目を追加した尺度となっている。よって、先行研究では、全25項目の質問項目が5つの因子構造に分類されているという結果が確認されているが、本研究では先行研究の倍近くの因子構造が確認できた。質問項目の信頼性を意味する α 係数については、第I因子が $\alpha=.69$ 、第II因子が $\alpha=.84$ 、第III因子が $\alpha=.78$ 、第IV因子が $\alpha=.72$ 、第V因子が $\alpha=.73$ 、第VI因子が $\alpha=.72$ 、第VII因子が $\alpha=.75$ 、第VIII因子が $\alpha=.75$ 、第IX因子が $\alpha=.72$ という値を示した。集団凝集性尺度の α 係数に比べるとやや数値が低くなっているが、スポーツ動機付け尺度についても質問の信頼性が認められた。集団凝集性尺度の合計点とスポーツ動機付け尺度の合計点における相関関係と各尺度の因子ごとの相関関係を分析した結果、集団凝集性尺度の合計点とスポーツ動機付け尺度の合計点の変数間に有意な相関($r=0.538, p<.001$)が認められたため、全体としては集団凝集性とスポーツ動機づけの間には正の相関があるということが認められた。

4. 結論

大学サッカーサークルにおける集団凝集性の向上要因として、スポーツ参加動機づけは正の相関を示したことにより、スポーツ参加動機づけは、集団凝集性を向上させる要因の1つであることが分かった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究にご協力していただいた全ての方に感謝の意を表します。